

「多言語母語の日本語学習者横断コーパス (I-JAS)」から見た
日本語学習者の会話における「で」の使用実態について
—日本語母語話者との比較を通じて—

On the Usage Patterns of 'de' in Conversations by Japanese Language Learners:
An Analysis Based on the "International Corpus
of Japanese as a Second Language (I-JAS) "

劉 洋
LIU Yang

「多言語母語の日本語学習者横断コーパス (I-JAS)」から見た 日本語学習者の会話における「で」の使用実態について —日本語母語話者との比較を通じて—

劉 洋*

1. はじめに

日本語母語話者の会話においては、「で」という接続表現が頻出する。石黒 (2007) は11本の大学講義における接続詞の使用実態を分析し、文頭に接続詞を持つ文が全6717文中2481文、すなわち36.9%を占めると述べる。また、萩原 (2014) は、異なる場面 (初対面の人、友人関係、親しい友人、親しい男性同士、教師と学生) における接続詞の使用傾向を調査し、すべての場面で「で」の使用率が高いことを示した。一方で、石黒 (2017) では、中国語母語話者を対象とした調査から、「で」が他の接続詞に比べて習得が難しいことが示されている。

筆者の調査によると、『中上級学習者のためのブラッシュアップ日本語会話—みがけ! コミュニケーションスキル』(スリーエーネットワーク)、『くらべてわかる初級日本語表現文型ドリル』(ジェイ・リサーチ)、『くらべてわかる中級日本語表現文型ドリル』(ジェイ・リサーチ)、『J.BRIDGE for Beginners vol.1・2』(平凡社)、『みんなの日本語初級Ⅰ・Ⅱ』(スリーエーネットワーク) および『げんきⅠ・Ⅱ』(The Japan Times) 等の会話指導がある日本語教科書では、接続詞「で」が含まれる会話文は存在するものの、解説があるものはない。

(1) ①最近、親に戻ってきてほしいって、よく言われるんだ。

②そうなんだ。で¹、自分はどうなの？

③迷うよ。半々ってとこ。

『わかる！話せる！日本語会話発展文型125』(p.207)

(2) 父：ええ、まあ。子供の時から「父一人、子一人」でしたから、女性と話すのが苦手で…

母：あら、そうだったの？ぜんぜん気づかなかった。

聞き手：(笑) で、それがきっかけで、二人は付き合い始めたんですね。その時、久美子さんは高盛さんを男性として意識していたんですか。「この人、すてきだなあ」とか、「ハンサムだな」とか。

* 岡山大学大学院社会文化科学研究科博士後期課程3年

¹ 下線と太字の部分は筆者によるもの。以下も同様。

『JBRIDGE for Beginners vol.2』(p.16)

そこで、本稿では、このように習得が難しく、かつ教科書において十分には扱われていない接続詞「で」の、日本語学習者の具体的な使用実態と、日本語母語話者の使用実態との差異を明らかにする。本稿は次のように構成される。2節で言語習得研究における「で」に関する先行研究の問題点を指摘したうえで、研究目的を述べる。3節で調査方法について紹介する。4節で母語・学習環境別および日本語のレベルという二つの側面からの調査結果を分析する。5節で日本語学習者と日本語母語話者の具体例を示しつつ、両者の使用における差異を述べる。6節は今後の課題とまとめである。

2. 先行研究と問題点

言語習得の観点から「で」を扱った主要な論文として深川 (2007)、宇佐美 (2013)、および石黒 (2017) が挙げられる。

まず、深川 (2007) では、上級日本語学習者が談話に使用した接続表現を、日本語母語話者と比較して研究を行った。この研究によると、接続詞「で」は学習者の発話ではあまり見られなかったという。深川 (2007) は、「で」が文頭で発話される際、その音声の短さから、学習者が気付きにくいと指摘し、この表現の使用が学習者にとって難しいと述べている。

続いて、石黒 (2017) の研究では、中国語を母語とする日本語学習者の独話で使用される接続詞を調査した。この研究では、中国語母語話者は日本語母語話者に比べて「で」の使用が少ないことが明らかになった。また、中国語の「然后」という接続詞と「で」の対応関係を分析したが、明確な関係は見出せなかった。この結果から教育指導では、母語の転移を取り入れるのが難しいと結論付けられている。

最後に、宇佐美 (2013) は、学習者に「で」の使用を促進するため、実験的研究を行った。この研究では、「インプット洪水」²と「インプット強化」³に加えて、「明示的な文法説明」の必要性を指摘している。

以上の先行研究によると、日本語学習者による「で」の使用は少ないという傾向が明らかにされてはいるものの、具体的な使用実態に関する詳細な調査はまだ不十分である。特に、学習者が「で」をどのように習得しているのか、母語による使用の差異はあるのか、また日本語母語話者の使用との差異があるのかといった問題が残されている。そこで本稿では、『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』(以下、I-JAS)を利用して日本語学習者を対象として「で」の使用実態を分析する。

² 「インプット洪水」は、「特定の言語形式を頻繁にインプットの中で使用することによって、学習者の注意を特定の言語形式に向けようとする」ものである。(宇佐美:2013 p.198)

³ 「インプット強化」は、「下線や矢印といった視覚的目印を使用することによって、学習者の注意を特定の言語形式に向けようとする」ものである。(宇佐美:2013 p.198)

さらに、具体的な用例を通じて、日本語母語話者との使用法の違いを考察していく。

3. 調査方法

上述した目的のために、本稿では、I-JASを利用して日本語学習者の会話文における「で」の出現を母語・学習環境別と日本語のレベルという二つの側面から分析を行う。検索エンジン中納言 (version2.4.2) を用いて、検索方法は以下のように指定した。

検索方法：短単位検索の書字出現形が で

条件を追加する：品詞の大分類が接続詞

タスク：対話、ロールプレイ1、ロールプレイ2⁴

データセット：第一次～第五次

4. 調査結果

4. 1 母語・学習環境別にみる「で」の使用状況

この節では、I-JASの第一次データを利用して母語・学習環境別に「で」の使用状況を見る。第一次データは、海外の各母語話者（12言語）の日本語学習者15名、国内自然環境の日本語学習者15名、国内教室環境の日本語学習者15名を同程度（中級程度）となるようサンプリングしたデータである。

表1では、被調査者の母語・学習環境ごとの使用回数、使用者数、使用者数の割合及び平均使用者数をまとめて示している。

表1 母語・環境別にみた対話・ロールプレイにおける「で」の使用状況⁵

	使用回数 (回)	使用者数 (人)	使用者数の割合 (%)	平均使用回数 (一人あたりの使用回数)
中国語	6	3	20	2.0
韓国語	43	9	60	4.8
英語	45	10	67	4.5
インドネシア語	9	6	40	1.5
スペイン語	8	7	47	1.1
トルコ語	5	4	27	1.3

⁴ タスクの詳細については、「I-JAS利用マニュアル簡易版 データの概要と検索システムの使い方 2020年11月 Ver.4」https://chunagon.ninjal.ac.jp/static/2.7.2.4/ijas/I-JAS_Manual.pdfを参照のこと。

⁵ データ中、「で、で」という形式は1回のみカウントされる。

ハンガリー語	7	5	33	1.4
フランス語	22	8	53	2.8
ベトナム語	6	2	13	3.0
ロシア語	24	5	33	4.8
ドイツ語	42	7	47	6.0
タイ語	32	8	53	4.0
日本語母語話者	216	15	100	14.4
国内教室	8	4	27	2.0
国内自然	213	11	73	19.4

表1によると、日本語母語話者と国内自然環境での学習者に「で」の使用が顕著にみられる。これに対して、海外の各母語話者の学習者と国内教室環境での学習者に「で」の使用が少ない。

具体的には、日本語母語話者では、被調査者15人中全員が使用しており、1人あたりの平均使用回数は14.4である。また、国内自然環境の学習者では、被調査者15人中11人が使用しており、平均使用回数は約19.4である。日本語母語話者の使用より上回っている。

一方、国内教室環境での学習者は、「で」の使用が少ないことが観察される（平均使用回数は2.0）。また、海外環境の学習者の場合、どの母語の学習者においても「で」の使用は日本語母語話者と比べて少なく、平均使用回数は6回以下である。母語の違いによる使用の差異は顕著にみられない。

石黒（2017：207）は「中国語を母語とする学習者は日本留学を機に「で」を頻用しはじめることを考えると、日本で日本人の会話を聞いたり日本人と会話をしたりするなかで自然に「で」を習得する」と指摘している。本調査でも、国内自然環境の学習者は海外環境および国内教室環境の学習者より「で」を多く使用していることが確認され、これは実際のコミュニケーションの中で「で」を習得していることが一因として考えられる。

以上、先行研究では着目されてこなかった母語・学習環境別という側面からの分析をまとめると、(3) のとおりである。

- (3) i 「で」の使用は、学習環境の違いによる差がみられる。具体的には、国内自然環境で習得している学習者に「で」が多用されている。これに対して、国内教室環境・海外環境の学習者には使用されているが、それほど多くない。
- ii 「で」の使用は、母語の違いによる差がみられるが、それほど顕著ではない。このため、母語の影響を判断するのは難しい。

4. 2 日本語のレベル別にみる「で」の使用状況

この節では、日本語の能力レベルごとの学習者の「で」の使用状況に焦点を当てた調査を行う。分析の対象として、被調査者の中で数が比較的多い中国語・韓国語・英語を母語とする学習者の第一次から第五次までのデータを取り上げる。さらに、先行する調査において「で」の使用が頻繁であった国内自然環境での学習者も含めて調査を行う。

学習者の習熟度は、Japanese Computerized Adaptive Test (J-CAT) の合計得点によりレベルを分けている。J-CATによるレベル分け及び各母語の学習者の人数は、表2に示す通りである。

表2 J-CATによる学習者レベルと学習者の人数

J-CAT 得点	レベル	中国語母語話者	韓国語母語話者	英語母語話者	国内自然習得者
0-99	初級前半	—	1	11	4
100-149	初級	2	5	31	10
150-199	初級後半	30	8	32	13
200-249	中級前半	75	26	22	15
250-274	中級	50	20	3	4
275-299	中級後半	27	18	1	4
300-324	上級前半	11	10	—	—
325-349	上級者	4	10	—	—
350以上	超級者	1	2	—	—
合計		200	100	100	50

表2で示したとおり、レベルの分布は母語により異なっている。中国語母語話者は、初級後半から上級前半までと判定される学習者が多い。韓国語母語話者は、中級前半から上級までと判定される学習者が多い。英語母語話者は、初級前半から中級前半までと判定される学習者が多い。一方、国内自然環境の習得者は、初級から中級前半までと判定される学習者が多い。今回使用したデータでは、韓国語母語話者が比較的日本語のレベルが高いと言える。

次に、レベル別に見た「で」の使用状況を表3に示す。

表3 中国語・韓国語・英語を母語とする学習者のレベル別にみた「で」の使用状況

	中国語母語話者				韓国語母語話者				英語母語話者				国内自然習得			
	使用人数	レベルでの使用者数の割合(%)	使用回数	平均使用回数	使用人数	レベルでの使用者数の割合(%)	使用回数	平均使用回数	使用人数	レベルでの使用者数の割合(%)	使用回数	平均使用回数	使用人数	レベルでの使用者数の割合(%)	使用回数	平均使用回数
初級前半	-	-	-	-	1	100	1	1	2	18.1	2	1	1	25.0	2	2.0
初級	0	0	0	0	2	40.0	12	6	11	35.5	14	1.3	6	60.0	151	25.1
初級後半	11	36.7	12	1.1	2	25.0	4	2.0	11	34.4	17	1.5	8	61.5	128	16
中級前半	24	32.0	85	3.5	17	65.3	109	6.4	10	45.5	98	9.8	11	73.3	205	18.6
中級	16	32.0	149	9.3	16	80.0	131	8.2	2	66.7	62	31.0	1	25.0	36	36
中級後半	15	55.6	178	11.9	16	88.9	143	8.9	1	100	26	26.0	4	100	50	12.5
上級前半	5	45.5	12	2.4	6	60.0	46	7.7	0	-	-	-	-	-	-	-
上級	2	50.0	18	9.0	10	100	125	12.5	0	-	-	-	-	-	-	-
超級	1	100	3	3.0	2	100	10	5.0	0	-	-	-	-	-	-	-

表3のデータによると、国籍に関係なく、多数の学習者が初級前半段階から「で」の使用を開始していることが示されている。しかしながら、この段階における使用人数及び使用回数は比較的少ない。中級レベルに達すると、これらの数値は顕著に増加し、一人当たり約10回の使用を示す学習者も確認される。

図1で示されているように、中国語・韓国語・英語を母語とする学習者において、日本語能力レベルの向上と共に「で」の使用者数の割合及び平均使用回数は増加する傾向がある。使用者数は、初級レベルの33.3%から、中級レベルの48.3%を経て、上級レベルの65.7%にまで上昇している。平均使用回数は、初級レベルの1.6回から、中級レベルの8.4回を経て、上級レベルの8.7回にまで上昇しており、日本語母語話者の使用実態に徐々に近づく傾向が見られる。

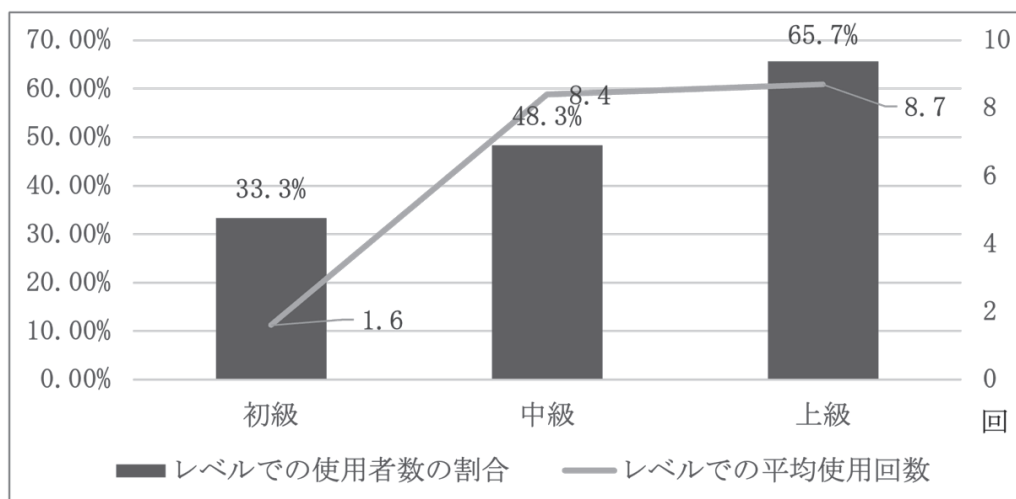


図1 中国語・韓国語・英語を母語とする学習者のレベル別にみた「で」の使用状況⁶

一方、表3での国内自然習得者はレベルに関わらず、初級から使用者数と使用回数は多く見られる。

4. 3 まとめ

従来の研究では、日本語学習者の接続詞「で」の使用が少ないと指摘されてきたが、母語・環境別および日本語レベル別からその使用実態についての考察は行われていなかった。そこで本稿では、これらの二つの側面から「で」の使用を考察した。その結果、二つの主要因が「で」の習得に影響を及ぼしていることが明らかになった。第一の要因は学習環境である。国内自然環境の学習者は国内教室環境の学習者に比べ、「で」の使用を早期に開始し、使用頻度も高いことが示されている。第二の要因は学習者の日本語能力レベルである。海外環境の学習者においては、日本語の能力レベルが上昇するにつれて、日本語母語話者の使用頻度に近づいていることが観察された。

5. 「で」の使用について

本節では具体的な使用例を示しつつ、日本語学習者と日本語母語話者間で「で」の使用の差異を見てみる。

5. 1 日本語母語話者の場合

「で」の言語学的位置づけに関しては、従来、接続詞としての機能に焦点を当てた研究が多く見

⁶ 表3に示されているように、一部の学習者のデータが不足しており、比較が困難であるため、初級前半、初級、初級後半を総じて初級レベルとして扱い、中級前半、中級、中級後半を中級レベル、上級前半、上級を上級レベルとして分類している。また、超級話者は合計4人しかおらず、数が少ないため、今回は観察対象から外す。

られ、特に口語表現における「それで」の使用に関する分析が蓄積されてきた（有賀：1993、山本：2004、日本語記述文法研究会：2009）。その役割に関しては、次のような幾つかの見解が見られる。

串田（2009）によると、「で」は、「何らかの成分が次に産出される連鎖的環境を作り出すが、次に来る成分の種類は基本的に限定しない。それは、次に発話することがどんな種類の成分であっても、さらに、次にいうことを決めていないときにも使うことができる」と述べている。一方、小出（2008）、石黒（2010）、中島（2011）らは「で」がフィラー的な用法を獲得していると指摘している。特に小出（2008）は、このことについて比較的详细な分析を展開している。

小出（2008）では、「で」は基本的な機能を対話⁷と独話⁸に分けて考察した。

- (4) a. 対話：目下の話題や文脈に区切りをつけると同時に、そのあとに目下の関心事が続くことを示す。後続する「目下の関心事」とは、既出話題であったり、現話題の関連話題であったりするが、それらの内容を展開・補完するなどして、談話構造上の次のステップに進むことを示す。

- b. 独話：フィラー化する「で」

「で」は、とくに独話においては、目下の話題・内容が展開しているときに、発話処理に連動し、区切りを示すことにより、処理を支援し、また処理のための心的な余裕を作るというフィラーとしての機能を持つ。このような「で」は、発話冒頭に頻出することがあるが、aに挙げた基本的な機能を保持しており、連続的な内容の発話を形成処理中であることを示す。

(p.38を筆者がまとめた)

小出（2008）の見解によると、独話における発話冒頭の「で」にフィラー的機能を認めているが、会話の「で」はそのような役割を持っていない。

以上の分析結果に基づくと、「で」の役割は従来の接続詞の範疇を超越し、後続する文の類型に対する制約が緩和されていることがわかる。さらに、その出現位置と使用頻度の分布には相関関係があるようである。一般的に、接続詞は文頭に位置するという統語的特徴を有するが、例（5）に示された日本語母語話者の発話データをみると、「で」は短時間のうちに高頻度で出現し、多様な統語的位置において使用されることが確認される。

(Cは調査者、Kは被調査者)

⁷ 小出（2008）は会話のデータとして『インタビュー形式による日本語会話データベース』（北九州市立大学）のサンプルを使用している。

⁸ 小出（2008）は独話データとしての国立国語研究所（2004）の70の学会発表のデータを使用している。

- (5) JJJ03-I-01270-C: ヘーあたし『寄生獣』ってタイトルしか知らないんですけど、〈はい〉簡単にどんな話とかがって教えてもらっていいですか

JJJ03-I-01280-K: 簡単に、んか突然、まあ普通の、世界、ま日本の世界、に、〈はい〉ほんと突然 〈はい〉 まあ、その寄生虫みたいな、〈はい〉が発生して、〈はい〉①⁹ で、その寄生虫がまあ人の体に入り込んでしま、って、②でその、入りこまれ脳に入り込まれてしまったら、なんか人の形をしたなんか寄生、虫みたいなものになってしまうんですね、〈うんうん〉③で、それ、がえっと、なんかまあ人類と共存ではないんですけど、〈んー〉まあその、まその種の繁栄というか 〈んーんー〉 どう生きていくか、〈うん〉 てんみみたいな、その寄生虫側 (がわ) が、いろいろ企て、〈うんうん〉 一方、〈うん〉 んか主人公の 〈んー〉 人は、その一、寄生虫が体に入り込む、じゃうんすけど (入り込んだじゃうんですけど)、〈うん〉 ぎりぎりまで止め、〈うんうんうん〉 脳に入るのをストップさせてしま、で、だから右腕だけに寄生されちゃうんです 〈んーんーんーんー〉、④でな、なかなか頭はもう人間で、こう右手だけ寄生虫に寄生されたみたいななんかいろいろ、特殊な能力を身に付け、⑤でなんか手が伸びるだとか、変形するだとか 〈んーんーんーんー〉 ⑥で、えーっと、その人間側としてはその寄生虫ってのは、まあ、まあ、いわまあ害虫みたいな物で、〈ん、ん、ん〉 まあ殺してしまえばいいんじゃないかという話、になるんですけど、その、寄生虫側の意見としては、その、人間が、地球上にとっては一番のその害悪な存在ではないか、みたいな、そうですね、その、普段人間は、〈んー〉 その動物とか殺して食べてるのに、〈んーんーんー〉 あその寄生虫は、人間を、餌にするんですね、〈おー〉 ⑦でその人間を食べるのはその人間にとって豚とか鳥とかを食べるのと、〈はーはー〉 等価ではないかみたいな言い分で、〈あーあーあーあー〉 まあなんだかんだ、続いていくみたいな

(日本語母語話者/JJJ03-I)

次に、日本語母語話者の会話データを観察し、「で」は具体的にどのような位置で使われるか、どのような役割を果たしているかを検討していく。

4.1節で収集した日本人15名のデータにおいては、「で」の出現の回数は216回であり、発話の冒頭および発話中に見られる。本稿では、発話の冒頭に「で」が出現する場合は、ターンの交替の後

⁹ ①、②…といった連番は筆者によるもの

に最初にくる状況を指す。「はい、で～」の形では、感動詞・応答詞が先行しているため、発話中であると認定する。また、例(6)では、「で」が発話の末に位置している例が観察されるが、これは話者の意図ではなく、聞き手の「すみません」という発言によって話者の発話が中断されたため、この例も発話中の用例として分類されても妥当であると考えられる。

- (6) JJJ57-I-00480-K: あー、熱中してることですかー? 〈はい〉 えっとー、私あの一、松山ケンイチさんの、〈はい〉 ファンで 〈へー〉、あの、テレビのドラマで、見
てから 〈うん〉、あのとっても大好きになって

JJJ57-I-00490-C: あそうですか

JJJ57-I-00500-K: あの、ぜひ一度お会いしたいと思って

JJJ57-I-00510-C: あ、そんなにですね

JJJ57-I-00520-K: はい、あの、エキストラ、に参加を、してみたんです

JJJ57-I-00530-C: そうなんですか

JJJ57-I-00540-K: はい、⑧で

JJJ57-I-00550-C: すみません、それはドラマですか?

(日本語母語話者/JJJ57-I)

216回のうち、発話の冒頭の出現は48例であり、発話総数(15名の日本語母語話者の発話総数は2728である)の1.8%を占める。一方、発話中に出現は166例で、発話総数の6.1%を占める。さらに、発話中に出現する「で」の使用位置を、直前に現れる表現によって大きく四つに分けている。そのため、今回のデータで「で」の出現位置は次のように分類できる。

- (7) 発話の冒頭 ターンの交替の後に最初にくる 例(9)⑩

発話中 テ 表 現: 「発生して」のように「動詞+て/で」、「若くて」のように「形容詞
+て/で」などという形 例(5)①②

文末表現: 「なってしまうんですね」のように発話が統語的に完結する形
例(5)③④⑦

感動詞・応答詞¹⁰: 「はい」「そうですね」「うん」など 例(8)⑨

そ の 他: 文の途中での副詞や名詞のあと、「～から」「～ので」「～たら」「～
けど」のあとなどの接続助詞の後、「～ずに」「～たり」などの助動

¹⁰ データ中、「で」よりフィラーが先行する用例は9例がある。伊藤(2012: 40)で指摘した「で」は「えーと」「んー」「あの一」といった「発話産出に何らかの問題があり、現時点では産出できないことを示すもの」より先行するという観点と矛盾している。この点についてはさらに検討する余地があると思われる。

詞の後、出現、これらの総数は少ないとは言えないが、各出現の数が少ないため、その他に分類されている 例(5)⑤⑥ 例(9)⑪

- (8) JJJ26-I-02440-K: 要は、なんかー、昔の良かった時の地球の状態に戻そうみたいな活動でー、〈へえー〉まあ簡単に言えば、なんかこうもっとー、その(連体詞)ー、水をきれいにしようとか、自然をー、もっとー増やそうとかそういう活動なんですけど、〈はい〉ドイツ語でど、なんとかっていう意味だったんですけどー、そういう、活動は、私もなんか、科学が発展するのはいいと思うんですけどー、なんか、その(連体詞)代償に、〈うーん〉なんか自然を壊すのはどうかなと思うのでー、まあ、私は、科学を発展させる派か、自然を守る派かで分かれるんだったら自然のほうに行こうかなっていう、〈ふーん〉のは、ありますね、はい

JJJ26-I-02450-C: ああ、そうですか、じゃそういう活動をして、行きたいというのが

JJJ26-I-02460-K: そうですね、⑨で、それ、とー、〈はい〉なんか、ちょっとずれちゃいますけど今、なんか動画投稿サイトでー、

(日本語母語話者/JJJ26-I)

- (9) ⑩で、お話としてはそのふ、えーその主人公が、えー、えー、きん近畿商事とゆうですね関西にある、えー、ま繊維メーカーのあの一繊維の、から始まった、えー商社に入って、そこからだんだんこう一人間的にもその商社マンとして成長しながら〈うんうんうん〉、えーその一、企業を大きくしていくと、⑪で最終的には副社長までな成り上がっえー上がっていつてー(成り上がっていつて)ー〈はい〉いろんなものを解決しながら、えー国益も考えながらその、えーと大きな仕事を成しそげ成し遂げていくと〈うん〉、まあそういったお話になっています

(日本語母語話者/JJJ05-I)

続いては、各位置における「で」の役割をみていく。

テ表現およびその他という類は統語的に非完結的な性質を持ち、後続情報の存在を聞き手に予期させることができる。このような特性は話の連続性を保持する。一方で、明確な切れ目の欠如により、丸山(2014)が指摘してきた「長い節連鎖」が生じやすい。これは、聞き手にとってわかりにくく、話し手にとって思考が乱れやすいものである。このような位置に、「で」の使用によって、前の発話との「区切り」をつけながら、これからの話を展開、補足することができる。しかしながら、会話はいつも実時間内で行われるため、後続発話の円滑な産出が常に保証されるわけではない。このような状況で、「で」は小出(2008: 38)が指摘するように、「内容の区切りを明示することは、

話し手にとって、その処理に区切りをつけ、保持単位を明確にするとともに、一瞬の心的な余裕を確保する手段」として働いている。

これに対し、文末表現や感動詞・応答詞は高い統語的独立性を有し、聞き手の即時的理解を促進できる。このため、「で」はただ「目下の話題や文脈に区切りをつけると同時に、そのあとに目下の関心事が続くことを示す。後続する「目下の関心事」とは、既出話題であったり、現話題の関連話題であったりするが、それらの内容を展開・補完するなどして、談話構造上の次のステップに進むことを示す」として働いてもよいと考えられる。

さらに、今回のデータには、発話中の「で」の出現のうち、テ表現とその他類に後続する「で」が全体の63%に達している。つまり、「で」は会話におけるフィラーとして働く場合が多いと予想される。

以上のことから、小出(2008)を参照し、日本語母語話者の会話における、「で」の使用に関してまとめると、次のようになる。

- (10) i 発話の冒頭、発話中の感動詞・応答詞および文末表現の後の「で」:「目下の話題や文脈に区切りをつけると同時に、そのあとに目下の関心事が続くことを示す。後続する「目下の関心事」とは、既出話題であったり、現話題の関連話題であったりするが、それらの内容を展開・補完するなどして、談話構造上の次のステップに進むことを示す」。
- ii 一方、発話中のテ表現およびその他類の後の「で」: 特に頻出することにより、1. 話の全体からみると、短時間内で、様々な統語的位置に現れ、全体の連続性を保持する。2. 話の局所からみると、「目下の話題・内容が展開しているときに、発話処理に連動し、区切りを示すことにより、処理を支援し、また処理のための心的な余裕を作るというフィラーとしての機能を持つ」。

5. 2 日本語学習者の場合

日本語母語話者に対し、日本語学習者のデータの「で」は、(10) iiのような役割を十分に果たしていないことが観察される。上級の学習者であっても、発話冒頭や文末表現や感動詞の後の「で」が多数である。例えば、韓国語を母語とする上級の学習者の10名のデータにおいては、約74%の使用は発話の冒頭および感動詞・応答詞・文末表現の後である。

まず、中級学習者の例 (11)、(12) と上級学習者の例 (13)、(14) において、「で」の出現位置は「毎日」や「～て」といった後に見られるが、主要な使用は発話の冒頭や「死にました」、「受けました」、「読みました」といった表現の後である。

- (11) あーなんかー、あ、中学の〈うん〉女子きょうさ(教師)が、教師が〈はい〉いったんです

(いたんです) けれども〈えーえーえー〉あー、あーその学校に、まあ自分の娘をあー自分の娘を連れて、いたんですよ (いったんですよ) 〈はい〉ま、毎日 〈うんうんうん〉 で、それで、あう、ある日ーその娘が、死にました 〈え、はい〉 で犯人はその学校に通っている、学生、二人、で、でも、日本、の、あーなんか法では、あーそれーその学生たちが若いから処罰、できなくてー、あな、なんか個人的には、く、復讐、す、する、ストーリーです 〈へー〉はい、なんか、僕はーこれを最初に映画で、見てましたけど

(韓国/中級/KKD48-I)

- (12) EUS14-I-00340-K : そうですねー、ええと昨日は、まあ朝起きて、ええと、さいしゅう (最初) の一限目のクラスの、ええと作文ーがええと印刷しなければならなかったので 〈うん〉 まずそれをして、でーええと、うーん、きーがえとええと、まあメイクとか 〈うん〉 えっとー歯磨きとかをしているながらえとコーヒーを入れて (いれて)、ええとそれでまあ簡単なええと朝食を食べてから、ええと家を出ました

EUS14-I-00350-C : うんうん

EUS14-I-00360-K : で、うーん、十一時半に、ええとさいしゅう (最初) のクラスがあってええとそれは政治学の一授業ですね 〈うん〉、ええとそこでまあ、ええと作文を提出して、ええと講義を聞いてから、ええとーまあ二限目のクラス 〈うん〉、ええと中国語に行きました

(英語/中級/EUS14-I)

- (13) KKR26-I-00360-K : で、九時から十時半までじゅ、あ、十時十五分まで、授業を受けて 〈ん〉、家に帰って、ちょっと休んで、また十二時に授業があって、十二時から、一時十五分まで授業を受けて、四十五分間休みの時間があって、休んで、また二時から五時まで授業があって授業を受けました、で、それから家に帰って

KKR26-I-00350-C : うん

KKR26-I-00360-K : 『からす (ガラス) の仮面』という漫画をよん、読みました 〈うんうん〉、で、昨日は、レポートの締め切りだったので、七時 (しちじ) ? からレポートの作文に取り組みました、で十時半まで、レポートを完成しました、その後 (あと)、うん、また『ガラスの仮面』をちょっと読んで、十二時に歩きたくてソンプクチョン? ってゆう所まで行って、散歩をしました (中略)

KKR26-I-00400-K : で、三時ぐらいまで歩いてー、家に帰って、シャワーを浴びて、五時ぐらいに寝ました

(韓国/上級/KKR26-I)

- (14) CCS40-I-00540-K: あ、はい昨日は朝は、十時から授業があって〈うん〉、でお昼は、友達と一緒に、あのご飯を食べて、おしゃべりして〈うん〉、午後の授業は三時半からなのでちょっと空き時間があったので

CCS40-I-00550-C: うんうん

- CCS40-I-00560-K: 友達とおしゃべりして、で、ここ(午後)の授業、は五時半まで、おわつたら、日本人の友達と一緒にご飯食べに行きました

(中国/上級/CCS40-I)

次に国内自然環境の学習者の用例である。国内自然環境の学習者における「で」の使用は多く観察される。「で」は「～て」、「ええ、する、ことに」といったところに現れており、日本語母語話者のように「で」を連続して使用することによって話の展開に用いるだけではなく、フィラーとして「処理を支援し、また処理のための心的な余裕を作る」という可能性がある。これは、国内自然環境の学習者による「で」の使用は数および使用の仕方が日本語母語話者に近いことを示している。このことによると、「で」の使用頻度だけではなく、使用の仕方も学習環境の影響を強く受けしていると推測される。国内自然環境の学習者は日常のコミュニケーションで日本語母語話者の言語使用に近づいていく過程を反映していると考えられる。

- (15) JJN12-I-00300-K: 昨日ですね〈うん〉、えー、午前中は、あ、家事の、こととかやってまして、で、え、まいいろいろ洗濯したりとか、〈はいはい〉お掃除したりとか、え、キッチンを全部片づけて〈はい〉、で、十一時頃(ごろ)から？ ちょと(ちょっと)、研修をやってまして、でまあ

JJN12-I-00310-C: あ、研修

- JJN12-I-00320-K: ええ、ポルトガル語の？〈はい〉ええ、ま私たちは、日本に住んでる限りは、〈はい〉ポルトガル語で通訳をするにあたって〈うん〉、いろいろ、あの勉強とか？〈うん〉ええ、する、ことに、でちょっと暇の時は、〈うん〉少しこう、ポルトガル語版のホームページとう、とか入って〈うん〉、研修、研修ってかまあ勉強？ええ、してます、〈ふーん〉二時間ぐらい勉強してました、ええ、それがお昼、時(とき)でした〈はい〉、はい、でえー、あとー、息子が？あの買い物したいてゆて(言って)、〈はい〉じゃ息子と？〈はい〉出かけをして、〈はい〉で、お買い物に行ったりとか、〈はい〉して、でお昼ご飯を、〈はいはい〉食べて、でまたうち、戻りました

(国内自然/中級/JJN12-I)

以上のことから、日本語学習者の会話における、「で」の使用に関してまとめると、次のようになる。

- (16) i 中国語・韓国語・英語を母語とする学習者による「で」の使用は主に発話の冒頭と発話中の文末表現や感動詞の後である。これらの「で」の使用は発話の展開を助ける。
- ii 国内自然環境の学習者による「で」の使用は日本語母語話者に似ており、発話の冒頭と発話中の文末表現や感動詞の後だけではなく、発話中の動詞のテ形表現の後、接続助詞「けど」「ので」などの後、または文末満、語以上の区切りの後に続けて使用されることにより、発話の「処理を支援し、また処理のための心的な余裕を作るというフィラーとしての機能を持つ」。

5. 3 まとめ

この節では、日本語母語話者と日本語学習者における「で」の使用の違いについて分析している。その結果は表4に示している。

表4 会話における日本母語話者および日本語学習者による「で」の使用位置とその役割

日本語母語話者 / 国内自然環境の学習者	中国語・韓国語・英語を母語とする学習者
接続詞「で」は、会話における話の展開を支援する役割を果たすだけでなく、発話の途中で動詞のテ形表現の後、接続助詞「けど」「ので」などの後、または文末満、語以上の区切りの後に続けて使用されることにより、発話の「処理を支援し、また処理のための心的な余裕を作るというフィラーとしての機能を持つ」(小出2008：38)	「で」は発話の冒頭・発話中の文頭に配置されて話の展開のみに用いられる傾向がある。

まず、日本語母語話者の「で」の使用はさまざまな統語的位置に見られる。局所における使用は1.発話の冒頭や文末表現の後で使用され、話題の区切りや新しい話題の導入を示す。2.発話中のテ形表現の後、接続助詞「けど」「ので」などの後、または文末満、語以上の区切りの後に頻繁に使用され、フィラーとしての機能を果たす。

話の全体における使用は3.話の連続性を保ちながら、話者に思考の余裕を与えるというフィラー的な役割がある。

これに対して、日本語学習者の「で」は発話中での多様な統語位置の使用が限られており、主に発話の冒頭や文末表現の後で使用される傾向がある。中級・上級学習者でも、日本語母語話者のようなフィラー的な使用が少ない。

一方、国内自然環境の学習者は「で」の使用頻度や使用方法が日本語母語話者に近い。日常的なコミュニケーションを通じて、日本語母語話者の言語使用に近づいていく過程が反映されている。

6. 終わりに

本稿は、日本語母語話者との比較を通じて、学習者による接続詞「で」の使用実態を量的・統語的な面から概観した。その結果、学習者の「で」の使用は、学習環境と日本語レベルの影響を受けていることが明らかになった。次に、日本語母語話者と学習者の具体例を観察した。日本語母語話者の「で」の使用は単に接続詞として話の展開という役割に留まらず、発話の「処理を支援し、また処理のための心的な余裕を作る」というフィラー的な役割を持つことが確認された。これに対して、中国語・韓国語・英語を母語とする学習者は「で」を主に接続詞として話の展開に用いる傾向があることを示した。したがって、日本語教育では、「で」が単なる接続詞としての役割だけでなく、フィラー的な機能も持つことを明示的に教える必要がある。学習者に「で」の談話機能の幅広さを理解させることが重要である。このうえで、学習者が「で」のフィラー的機能を習得するためには、実際のコミュニケーション場面での使用機会を増やすべきである。ロールプレイやディスカッションなどのアクティビティを通じて、自然な「で」の使用を促進できると考えられる。

最後に、石島・中川（2004）などによると、「で」には「添加」、「順接」のほか、「補足」、「対比」といった様々な意味・用法が存在している。今後の研究では、これらの意味・用法の側面から、日本語学習者の「で」の使用と日本語母語話者の使用を比較分析することにより、学習者の習得プロセスをより全面的に解明することが期待される。

参考文献

論文：

- 有賀千佳子 (1993)「対話における接続詞の機能について―「それで」の用法を手がかりに」『日本語教育』 pp.89-101
- 石黒圭 (2007)「講義の談話の接続詞」西條美紀 (研究代表者)『学際的アプローチによる大学生の講義理解能力育成のためのカリキュラム開発』2004～2006年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C)) 研究成果報告書 pp.54-63
- 石黒圭 (2010)「講義の談話の接続表現」『講義の談話の表現と理解』くろしお出版 pp.138-152
- 石黒圭 (2017)「談話研究からみた話し方教育への示唆―学習者は接続詞をどのように習得するか―」『習ったはずなのに使えない文法』くろしお出版 pp.195-210
- 石島満沙子・中川道子 (2004)「日本語母語話者の独話に現れる接続詞「で」について」『北海道大学留学 センター紀要』8 pp.46-61
- 伊藤翼斗 (2012)「発話冒頭における接続に関わる要素の順序:「で」を中心に」『間谷論集』6 pp.27-49
- 宇佐美恵子 (2013)「接続詞「で」の指導に関する実験的研究: インプット洪水・インプット強化・明示的な文法説明の効果」『第二言語としての日本語の習得研究』16 pp.196-213
- 串田秀也 (2009)「聴き手による語りの進行促進 ―継続支持・継続催促・継続試行―」『認知科学』16巻1号 pp.2-23
- 小出慶一 (2008)「発話行動における「で」の役割:「で」のフィラー化をめぐる」『埼玉大学紀要 (教養学部)』第44巻第2号 pp.27-40
- 中島悦子 (2011)『自然談話の文法―疑問表現・応答詞・あいづち・フィラー・無助詞』おうふう pp.179-213
- 日本語記述文法研究会 (2009)『現代日本語文法7 第12部談話 第13部待遇表現』くろしお出版 pp.65-88
- 萩原孝恵 (2014)『「だから」の語用論―テキスト構成的機能から対人関係的機能へ―』ココ出版
- 深川美帆 (2007)「接続表現から見た上級日本語学習者の談話の特徴-日本語母語話者と比較して」『言葉と文化』8 pp.253-268
- 丸山岳彦 (2014)「現代日本語の多重的な節連鎖構造について -CSJとBCCWJを用いた分析」『話し言葉と書き言葉の接点』ひつじ書房 pp.93-114
- 山本貴昭 (2004)「談話における接続詞「で」の用法―女性話者の談話を対象として」『国文学攷』181 pp.13-27

参考したウェブサイト：

日本語テストシスト J-CAT, <https://www.jcat2.org/html/ja/pages/interpret.html>（最終確認日 2023年3月30）

使用したコーパス：

「多言語母語の日本語学習者横断コーパス (I-JAS) version2.4.2」(I-JAS, International Corpus of Japanese as a Second Language) 国立国語研究所

使用した教科書：

水谷信子・松本隆・高橋尚子（2015）『わかる！話せる！日本語会話発展文型125』ジェイ・リサーチ

小山悟（2008）『J.BRIDGE for Beginners vol.2』平凡社